

心理臨床家志望動機の類型に応じた 研究活動およびエビデンスに基づく実践への 態度に関わる要因の検討

The influential factors on psychological research activity and attitude toward evidence-based practice in psychology: From the perspective of the career motivation types about clinical psychologists

新井 雅
跡見学園女子大学
Masaru Arai
Atomi University

要 約

本研究は、心理臨床家志望動機の観点から、心理専門職や大学院生の研究活動とエビデンスに基づく臨床実践への態度およびその関連要因について探索的に検討することを目的とした。臨床心理士指定大学院(修士・博士前期課程)の大学院生と臨床心理士等の心理専門職を対象とした調査の結果、志望動機に関して、心理支援探求型、消極型、権威・経済型の3類型が見出された。これらの動機の類型に基づくと、概ね全ての類型において、肯定的な研究体験は研究活動への興味・関心や自信と関連し、また、研究活動と臨床実践のつながりを学ぶ大学院での教育訓練環境は、研究活動およびエビデンスに基づく臨床実践への肯定的な態度に直接的または間接的に重要な役割を果たしている可能性が示された。一方、肯定的な研究指導・サポート、研究・分析に必要な学習環境等に関わる教育訓練環境から受ける影響の有無や程度は動機の類型ごとに異なっており、研究活動への興味・関心や自信の程度と臨床実践に関わるエビデンスへの態度との関連についても、心理支援探求型や消極型においてのみ有意な関連がみられた。心理臨床家志望動機等の個人要因に関して様々な特徴を有する大学院生や心理専門職にとって、どのような体験や教育訓練環境が、研究活動及びエビデンスに基づく実践への肯定的態度を促進し得るのか継続的に模索する必要性が示唆された。

【Key Words】心理専門職，志望動機，科学者－実践家モデル，研究活動，エビデンスに基づく心理学的実践

I 問題と目的

一般的に、心理専門職やそれを目指す学生は、研究活動より臨床実践への関心が高

く、心理専門職の養成においても臨床実践の教育訓練に重点が置かれる傾向にある。もちろん、メンタルヘルス上の諸問題への臨床実践は社会的ニーズも大きく、臨床現

場では目の前の人々への心理支援が優先される。しかし、心理専門職の専門性や臨床心理学の発展において科学的アプローチは重要な役割を果たすものであり(Shimoyama, 2004)、臨床実践に関わるリサーチクエスチョンのもと、多様な方法を用いてデータを収集・分析し、広く共有可能な科学的知見としてまとめあげるための研究活動が強く求められる。日本において、国家資格「公認心理師」を有する心理専門職の活動や、その養成の在り方が本格的に問われるこれからの社会状況の中で、研究活動のあり方を再考し、研究活動を基盤とした多様な臨床的・社会的活動へとつなげる試みを探求することが、心理専門職によるさらなる社会的貢献を果たすために必要不可欠と考えられる(新井, 2019a)。

諸外国では、科学者-実践家モデル及びエビデンスに基づく実践(Evidence Based Practice: EBP)の観点から、心理専門職にはクライアントの特徴、文化等を考慮しつつ、最良の研究知見と臨床的専門性を統合することが重視されている(APA Presidential Task Force on Evidence-Based Practice, 2006)。心理専門職に求められる科学者としての役割には、研究を通して新たな知見を生成すると共に、科学的な思考・手続きや実証的研究知見を臨床実践に活かすことがあげられる(Kahn & Schlosser, 2014)。先行研究では、研究に関する知識・技能・態度を促す大学院教育のあり方を検討する Research Training Environment(以下、RTE)に関する研究や(e.g., Gelso et al, 1996, 2013; Kahn & Schlosser, 2014)、心理専門職等の EBP に対する態度の調査および EBP 活動の展

開に影響を及ぼす要因の探索が行われ(e.g., Aarons, 2004; Lilienfeld et al., 2013; Nelson & Steele, 2007)、研究知見の生成や臨床的活用を促進する取り組みや教育訓練のあり方が積極的に議論されている。

日本においても、科学者-実践家モデルや EBP の重要性についてはこれまでも指摘されてきた(e.g., 岩壁, 2013; Shimoyama, 2004; 丹野, 2005)。しかし、日本の大学院生や心理専門職の研究活動および EBP への態度に関する実態調査や、それらを肯定的に促進し得る要因を探索した実証的研究は十分に蓄積されていない。また、英米等の諸外国と日本では文化的背景や心理専門職の訓練モデル、教育システム等に違いがあるため、日本の実態に即した調査・検討を行う必要がある。

以上の問題意識から、日本において研究活動や EBP に関わる態度およびその関連要因を探索的に調査した研究(新井, 2019b)では、日本の心理専門職や大学院生は必ずしも研究に対して興味・関心が無いわけではないものの、研究を遂行する自信が低い傾向にあること、大学院教育の多様な側面から研究に対する知識・技能・態度を育成しつつ、研究と臨床のつながりや関連性を学ぶ体験が必要であること、臨床業務に追われ研究を行うだけの余裕や設備、サポート等が十分ではない現場の心理専門職の置かれている環境の改善の必要性などが見出されている。さらに、上述の研究データを基礎としつつ、研究に関わる教育訓練環境および臨床実践に関わるエビデンスへの態度に関する尺度を試験的に作成し、大学院生と心理専門職を対象に調査を

行った研究(新井, 印刷中)では, 大学院生と心理専門職ごとに多少の違いはみられたものの, 教員自身が研究活動に対して意欲的であると共に, 研究活動と臨床実践のつながりの学習, 研究・分析に必要な学習環境の充実といった大学院での教育環境のほか, 卒業論文や修士論文以外で研究に関与する経験, 研究を通して得られた成功体験や自己の成長を実感する体験などが, 研究活動およびエビデンスに基づく臨床実践への肯定的な態度に直接的または間接的に重要な役割を果たしている可能性が示されている。

さらに, 研究活動を基盤とした多様な専門的活動を促進するための示唆を得るためには, 上述の大学院や修了後における教育訓練・研究環境等のあり方と共に, 大学院生や心理専門職自身の個人要因にも着目する必要がある。例えば, RTE 研究では大学院の教育環境と大学院生の個人要因(パーソナリティや認知スタイルなど)の相互作用の検討が必要とされている(Gelso et al, 2013)。実際に, 研究論文や書籍等の研究成果を従属変数とした場合に, 芸術的な性格特性と RTE 要素のうち研究活動への早期関与や興味・関心に基づく研究の探求との間に有意な交互作用がみられた研究(Mallinckrodt & Gelso, 2002)もある。このように研究活動や EBP に関わる教育訓練・サポート体制等が, どのような特徴を持つ大学院生や心理専門職にどのような影響をもたらし得るのかを詳細に検討することが重要と考えられる。

そこで本研究では, 個人要因として心理臨床家を志望した動機に着目する。より良い臨床実践や心理専門職の継続訓練, セル

フケア活動を促すために, 心理臨床家を志した動機の観点から検討することは重要である(Corey & Corey, 1998)。心理臨床家の志望動機については, 従来より過去の原家族や学校等で受けた葛藤, 心理的苦悩, 傷つき体験のような否定的経験の影響が主に指摘されてきた(e.g., Barnett et al., 2007)。一方, 心理専門職と社会心理学者の職業選択に関する動機と過去経験を調査した研究(Murphy & Halgin, 1995)では, 職業的な愛他主義や職業的達成, 出世の機会, 自己の成長と人への好奇心, 親密な対人関係を持った過去経験など, 否定的感情を伴う動機以外の動機が見出されている。金沢・岩壁(2013)の調査においても, 悩み・傷つき体験を含む他者貢献への意欲と共に, 心理学や心理療法, 心の働きに対する知的・職業的好奇心などの動機が見出され, 上野・金沢(2015)の研究では, 内的要因及び過去経験に基づく多様な因子から構成される心理臨床家志望動機尺度の作成と共に, 6種類の志望動機タイプ(消極型, 知的型, 経済型, 状況困難型, 苦悩内省型, 関係型)が見出されている。過去の心理的苦悩や他者貢献への意欲等の動機は, 臨床活動に傾倒する重要な要素になり得る一方, 以上のような多様な動機が見出されていることを踏まえると, これらの動機が臨床活動だけでなく研究活動との向き合い方とどのように関連しているのかを実証的に検討することは, 心理専門職の研究活動に関わる専門性のあり方を再考するための有益な基礎資料になると考えられる。

以上から本研究では, 心理臨床家志望動機の観点から日本の心理専門職や大学院生の研究活動と EBP に関わる態度およびそ

の関連要因について探索的に検討することを目的とする。なお、本研究は分析の焦点および紙面の都合から、新井(印刷中)の論文において割愛された分析・考察に相当するものである。

II 方法

1. 調査対象者

保健医療、福祉、教育等の諸領域で臨床活動に携わる心理専門職(臨床心理士資格取得済み・取得見込み)と、臨床心理士指定大学院(修士・博士前期課程)の大学院生に、郵送法・縁故法で協力依頼を行い、458名の回答を得た。本稿で分析対象とした変数に関して、データの不備があった者を除外し、429名を分析対象とした(有効回答率93.67%)。内訳は、心理専門職169名(男性44名、女性125名、平均年齢34.78, $SD=8.88$)、大学院生は、修士1年が143名、修士2年が117名、計260名(男性51名、女性209名、平均年齢26.56歳, $SD=7.34$)であった。

2. 調査内容

性別、年齢、臨床領域や理論的志向性等のほか、以下の(1)～(3)の質問項目を調査した。

1) 研究活動に関わる質問項目

心理学に関わる卒業論文執筆経験の有無、修士論文での研究経験、大学院在学以前に卒業論文や修士論文以外で指導教員等の研究に対して関与・補助した経験を有するかどうかを尋ねる質問項目「その他の研究経験(大学院以前)」などのほか、以下①②③の項目を実施した。

①研究に関する教育訓練環境尺度：大学

院(修士・博士前期課程)での研究に関する教育訓練環境を測定する尺度である。先行研究(新井, 印刷中)にて、「肯定的な研究指導・サポート」「研究と臨床のつながりの学習」「研究・分析に必要な学習環境」「教員の研究活動への意欲」の4因子24項目が抽出され、良好な α 係数と共に、4因子モデルに基づく構造方程式モデリングによる確認的因子分析から一定の適合度が確認されている。また、研究活動への興味・関心、学会への参加・発表回数等との相関分析の結果から、併存的妥当性も概ね確認されている。対象者には、大学院で受けている教育・環境を振り返りながら、全くあてはまらない(1)～よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた。心理専門職には項目表現を過去形にし、回想法にて回答を求めた。

②研究活動への興味・関心や自信、肯定的な研究体験：第一に、研究への興味・関心を尋ねるため、「研究をすることに興味・関心がある」「臨床活動に直接的または間接的に役立つ研究を行いたい」の2項目を作成し、全くあてはまらない(1)～よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた。第二に、研究への自信の程度を測定するため、先行研究(Forester et al., 2004)を参考にしつつ、計画を立ててデータを収集・分析し、考察・まとめ・発表を行う研究の基本プロセスに関わる項目(例：「研究計画を立てる」「量的なデータを分析する」「研究の結果や成果を発表する」)を新たに作成し(11項目)、全く自信がない(1)～とても自信がある(5)の5件法で尋ねた。第三に、研究の学習や経験の中で(卒業論文や修士論文、その他の研究等で)、成功したと思

える体験や自分の成長を実感した体験等を尋ねる4項目を作成し、全くあてはまらない(1)～よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた。

③学会への参加・発表および論文等の執筆経験：実際の研究活動の状況や成果発表経験について尋ねるため、国内・海外の学会への参加回数やポスター発表等の研究発表回数、研究成果の公表に関わる報告書や大学紀要、書籍、研究論文等の執筆経験を尋ねた。

2) EBPに関わる態度および環境に関する質問項目

①臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度：実証研究を通して見出された研究知見や研究に関わる知識・技能の臨床的有用性の認知、および基礎心理学を含む様々な研究者との交流意欲を測定する尺度である。先行研究(新井, 印刷中)において、「研究知見・技能の臨床的有用性」「実証研究に基づく臨床実践への意識」「心理学分野の多様な知見や研究者への関心」の3因子26項目が抽出され、良好な α 係数と共に、3因子モデルに基づく構造方程式モデリングによる確認的因子分析から良好な適合度が確認されている。回答者には、5件法(全くあてはまらない(1)～よくあてはまる(5))で回答を求めた。

②EBP要請環境：所属する大学院や勤務先においてEBPに関わる臨床活動が重視されているかどうかを、1項目5件法(全く重視されていない～とても重視されている)で尋ねた。

3) 心理臨床家志望動機(内的要因)尺度(上野・金沢, 2015)

上野・金沢(2015)で作成された項目を、

著者の許可を得て使用した。本尺度は、「自己の問題解決欲求」「専門的援助を通じた他者からの承認欲求」「他者への援助動機」「権威的立場への憧れ」「心への知的関心」「経済的安定への望み」6因子31項目から構成される。本調査全体の質問項目の分量や回答者の負担を考慮し、各因子の因子負荷量の高い上位3項目を用い、全くあてはまらない(1)～とてもあてはまる(4)の4件法で回答を求めた。

3. 調査手続き

郵送法・縁故法により協力を依頼し、同意を得た対象者にWeb調査を実施した(調査時期2018年1～3月)。本研究は著者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

Ⅲ 結果

1. 心理臨床家志望動機(内的要因)の類型の検討

心理臨床家志望動機(内的要因)尺度の各下位尺度の平均標準得点を用いてクラスタ分析(Ward法)を行った。対象者の数とクラスタの解釈可能性に基づいて検討した結果、3クラスタ解による分類が妥当と判断した(図1)。第一クラスタ(CL1)は、権威的立場への憧れと経済的安定への望み以外が正の値を示していたことから「心理支援探求型」、第二クラスタ(CL2)は全ての因子で負の値を示していたことから「消極型」、第三クラスタ(CL3)は権威的立場への憧れと経済的安定への望みが高い正の値を示していたことから「権威・経済型」と解釈された。

このCL1～3と対象者の人数・比率を

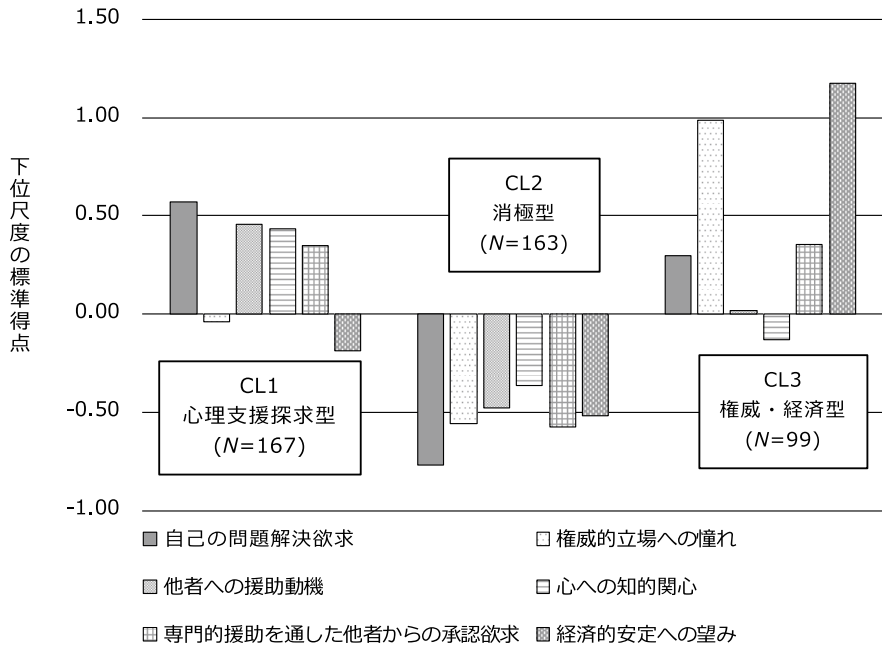


図1 心理臨床家志望動機(内的要因)に基づく類型

表1 「心理臨床家志望動機(内的要因)」類型別の大学院生および心理専門職のクロス集計

		CL1 心理支援探求型	CL2 消極型	CL3 権威・経済型	合計
大学院生	度数(%)	111(42.7)	86(33.1)	63(24.2)	260(100)
	調整済み残差	2.00	-2.60	.70	
心理専門職	度数(%)	56(33.1)	77(45.6)	36(21.3)	169(100)
	調整済み残差	-2.00	2.60	.70	

クロス集計し(表1), χ^2 検定を行った結果, 有意な偏りがみられた($\chi^2=6.98, df=2, p<.05$)。調整済み残差の絶対値1.96の基準に基づくと, 大学院生はCL1, 心理専門職はCL2に属する比率が高かった。さらに, CL1~3を独立変数, 研究に関する教育訓練環境や研究活動への興味・関心, 自信, 国内外の学会への参加・発表回数, 研究論文の執筆経験, 臨床実践に関するエビデンスへの態度を従属変数とした1要因

分散分析を行った結果(表2), 肯定的な研究指導・サポートはCL1>CL3, 国内学会への参加・発表回数はCL2 > CL1・CL3, 実証研究に基づく臨床実践への意識はCL2 > CL1・CL3であった。

2. 心理臨床家志望動機(内的要因)の類型別の多母集団同時分析

先行研究(新井, 印刷中)で行われた分析と同様, Kahn & Scott (1997)の研究を参

表2 「心理臨床家志望動機(内的要因)」 類型別の尺度得点の分散分析

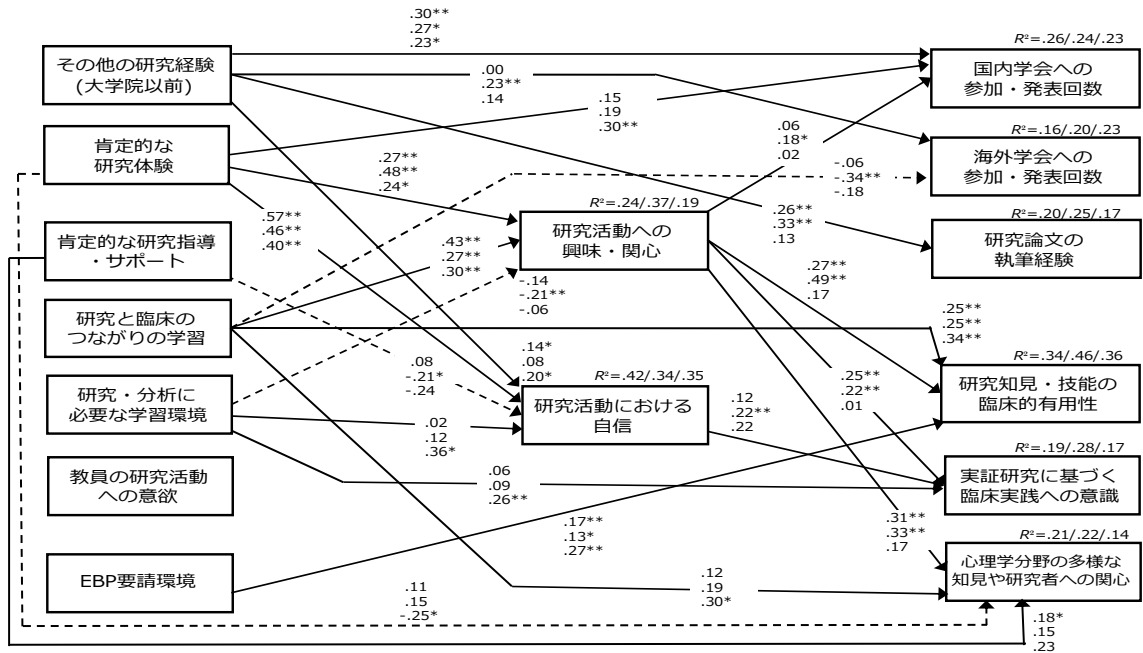
	CL1 心理支援 探求型 (N=167)		CL2 消極型 (N=163)		CL3 権威・ 経済型 (N=99)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
	研究に関する教育訓練環境尺度							
(1) 肯定的な研究指導・サポート	4.05	.80	3.95	.85	3.82	.83	2.53 †	CL1 > CL3
(2) 研究と臨床のつながりの学習	3.81	.78	3.70	.94	3.66	.85	1.17	
(3) 研究・分析に必要な学習環境	3.63	.77	3.54	.78	3.59	.73	.53	
(4) 教員の研究活動への意欲	3.58	.82	3.45	.96	3.49	.83	.95	
研究活動への興味・関心	3.96	.91	4.03	.99	4.08	.85	.59	
研究活動における自信	2.63	.75	2.78	.76	2.74	.68	1.63	
国内学会への参加・発表回数	6.53	11.25	11.16	17.92	7.11	12.59	4.79 **	CL2 > CL1, 3
海外学会への参加・発表回数	.49	2.69	.53	1.92	.23	.95	.69	
研究論文の執筆経験	.86	3.31	1.52	4.36	1.14	4.39	1.12	
臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度								
(1) 研究知見・技能の臨床的有用性	4.21	.49	4.18	.49	4.17	.50	.22	
(2) 実証研究に基づく臨床実践への意識	3.11	.51	3.25	.53	3.07	.55	4.51 *	CL2 > CL1, 3
(3) 心理学分野の多様な知見や研究者への関心	4.19	.63	4.15	.67	4.09	.63	.84	

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

考に、研究の教育訓練環境が、研究への興味・関心や自信を媒介として学会参加や論文執筆経験に影響を及ぼすモデルを仮定し、心理臨床家志望動機の類型別の多母集団同時分析を行った。その際、研究に関わる教育訓練経験は、研究活動そのものだけでなく EBP に関わる知識・技能・態度の育成にもつながることが期待されていることから (Kahn & Schlosser, 2014)、臨床実践に関わるエビデンスへの態度の各因子を従属変数としたモデルを検討した。その結果(図 2)、概ね良好な適合度が確認された (GFI = .99, AGFI = .82, CFI = .99, RMSEA = .04)。

全ての類型で、研究と臨床のつながりの学習が研究活動への興味・関心と研究知見・技能の臨床的有用性に正の影響、肯定的な研究体験も研究活動への興味・関心や

自信に比較的強い正の影響を示した。動機の類型ごとに異なる影響も示され、例えば、研究活動への興味・関心から臨床実践に関するエビデンスへの態度の各因子への影響は、心理支援探求型と消極型のみ正の影響がみられた。消極型では、肯定的な研究指導・サポートから研究活動における自信、研究と臨床のつながりの学習から海外学会への参加・発表回数、研究・分析に必要な学習環境から研究活動への興味・関心に負の影響がみられた。また、研究活動への興味・関心や自信から臨床実践に関わるエビデンスへの態度の各因子のいずれかに有意な正の影響がみられ、本調査で見出された類型の中では、唯一、消極型において研究活動への興味・関心から国内学会への参加・発表回数へ正の影響が確認された。権威・経済型では研究・分析に必要な学習



注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, R^2 は決定係数を表す。
 注2) 図の煩雑さを避けるため、有意でないパスや誤差項・共分散は省略した。
 注3) 標準化係数の値は、上から順に心理支援探求型、消極型、権威・経済型、 R^2 は左から順に心理支援探求型、消極型、権威・経済型の値である。

図2 研究活動や臨床実践に関するエビデンスへの態度に影響を及ぼす要因に関する多母集団同時分析 (心理臨床家志望動機の類型別)

環境から研究活動における自信や実証研究に基づく臨床実践への意識に正の影響、肯定的な研究体験から心理学分野の多様な知見や研究者への関心に負の影響がみられ、研究活動への興味・関心及び自信から、各学会への参加・発表や論文執筆、臨床実践に関わるエビデンスへの態度の各因子には有意な影響がみられなかった。

IV 考察

本研究では、心理臨床家志望動機の観点から心理専門職や大学院生の研究活動とEBPに関わる態度およびその関連要因の実態について検討することを目的とした。志望動機は内的要因に関わる尺度のみを用

いたため、上野・金沢(2015)の結果と全く同一ではなかったものの、クラスター分析では類似した類型がみられた。各動機が相対的に低い消極型(CL2)、権威的立場への憧れと経済的安定への望みが正の値を示した権威・経済型(CL3)は、先行研究(上野・金沢, 2015)においても消極型、経済型として見出されている。また、本調査では心理専門職のみならず大学院生をも対象とし、全体の対象者数や見出された類型数が異なるため先行研究との単純な比較はできないが、消極的理由に関わる記述の割合が全体の3.4%だった金沢・岩壁(2013)の結果や、消極型に相当する対象者が18.2%であった上野・金沢(2015)の結果よりも、消

極型(CL2)の対象者の割合は比較的多い傾向にあった。また、 χ^2 検定において心理専門職が消極型(CL2)に属する比率が高かった。これは現在、臨床活動に携わっている心理専門職に比べて大学院生の方が臨床家を志した当初の動機をより鮮明に意識化しやすかった可能性や、心理専門職に関しては、臨床家を志した当初の動機とは別に臨床活動を現在も継続している動機(金沢・岩壁, 2013)が生じている影響から、相対的に消極型に属する傾向が多く示された可能性が考えられる。

多母集団同時分析の結果、全ての類型において、研究と臨床のつながりの学習が研究活動への興味・関心と研究知見・技能の臨床的有用性に正の影響を示し、肯定的な研究体験も研究活動への興味・関心や自信に比較的強い正の影響が示された。大学院生および心理専門職別の多母集団同時分析を行った先行研究(新井, 印刷中)と同様に、研究活動と臨床実践は密接な関係にあり、臨床実践を充実させるためにも研究活動が不可欠であることを学ぶこと、そして、研究経験を単純に積めば良いのではなく、成功体験や自己の成長を感じられるような肯定的な研究経験をいかに積み重ねられるかが、研究への興味・関心や自信を高めるために重要な要素となっている可能性が考えられる。

一方、志望動機の類型ごとに違いもみられた。心理支援探求型では、特に研究と臨床のつながりの学習から研究活動への興味・関心への影響が他の類型よりも比較的大きい傾向がみられた。心理支援に関わる動機を高く有しているからこそ、研究活動が臨床活動とどのように関連し、つながる

のかを学ぶ体験によって、研究への関心がより高まる可能性があると考えられる。しかし、研究活動への興味・関心や自信から各学会への参加・発表や研究論文の執筆数への影響は確認されず、臨床実践に関わるエビデンスへの態度の各因子には正の影響が確認された。心理支援探求型には各学会への参加や論文執筆に関わる経験自体が相対的に少ないと考えられる大学院生が属する比率が高かったことの影響のほか、心理支援に関わる動機を有しているがゆえに、学術動向に関わる議論の場としての学会参加よりも、エビデンスに基づく臨床実践に対する肯定的な意識との関連がみられた可能性が考えられる。

消極型では、研究と臨床のつながり学習体験以外の教育訓練環境の要素は、研究活動への興味・関心や自信に対して肯定的影響はみられず、むしろ肯定的な研究指導・サポートや研究・分析に必要な学習環境が充実しているほど、研究活動への興味・関心や自信が低い傾向にあることが示された。臨床家への動機が相対的に低い対象者にとっては、研究に関わる指導や学習環境が充実しているほど、かえって自らの研究技能の不十分な点を自覚しやすかったり研究活動への抵抗感が増すという関係になっているのかもしれない。一方、肯定的な研究体験から研究活動への興味・関心や自信に正の影響、また研究活動への興味・関心または自信から国内学会への参加・発表回数や臨床実践に関わるエビデンスへの態度の各因子のいずれかに有意な正の影響も確認された。先の結果を含めると、研究に関わる教育訓練環境(研究と臨床のつながりの学習を除く)より、成功体験など肯定的

な研究経験を結果として積むことができたかどうか前向きな研究態度へとつながりやすい可能性が考えられる。

権威・経済型においても、他の類型と異なる特徴がみられた。まず、研究や分析を進める上で必要な資料や設備、学習経験の充実が、研究活動における自信や実証研究に基づく臨床実践への意識を高めるための重要な要素となっている可能性がある。一方、肯定的な研究体験から心理学分野の多様な知見や研究者への関心に負の影響、研究への興味・関心及び自信から、各学会への参加・発表や論文執筆、臨床実践に関わるエビデンスへの態度の各因子には有意なパスがみられなかった。地位や名声、優越感、経済的安定に関わる動機を有する対象者にとっては、研究への興味・関心、自信など肯定的な研究態度を有していたとしても、学会参加や論文執筆、EBPに関わる前向きな活動・態度へとつながるわけではない可能性のほか、また、自己の肯定的な研究体験は、かえって多様な研究者との交流への抵抗感や排他的な意識を高めやすい状態となっているのかもしれない。

以上、心理臨床家志望動機(内的要因)の観点から対象者を分類すると、研究に関わる教育訓練環境に関しては、研究と臨床のつながりの学習体験が全ての類型において研究活動やエビデンスに基づく実践への態度に肯定的な影響を及ぼしていた一方、教員の研究活動への意欲からのパスは見出されなかった。また、類型に応じて、肯定的な研究指導・サポート、研究・分析に必要な学習環境からの負のパスが部分的にみられ、心理臨床家を志した動機の種類によっては、これらの教育訓練環境から受ける影

響の有無や程度は異なる可能性が示唆された。同様に、研究への興味・関心や自信から学会参加等や臨床実践に関わるエビデンスへの態度への影響、その他の研究経験および肯定的な研究体験からの影響についても、その影響の有無や程度は類型ごとに異なっていた。特に、消極型以外の類型では研究への関心や自信が学会参加等の研究活動との関連がみられず、権威・経済型においては、臨床実践に関わるエビデンスへの態度に有意な関連を示した変数も限定的であった。これらの結果は、大学院生や心理専門職ごとの特徴を検討した先行研究(新井, 印刷中)とは異なるものであり、心理臨床家志望動機といった個人要因の観点に基づく、どのような体験や教育訓練環境が、研究活動及びエビデンスに基づく実践への肯定的態度を促進し得るのか継続的に模索する必要性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題として、各尺度の信頼性・妥当性のさらなる検討や縦断的調査の必要性など、先行研究(新井, 印刷中)において指摘された点に加え、次の2点について述べる必要がある。第一に、本調査では心理臨床家志望動機における消極型に相当する対象者が比較的多くみられたこと、研究活動そのものに関する認識や態度を尋ねる調査依頼を行ったことから、臨床活動よりも研究活動にも比較的関心の強い回答者によるデータが中心となっていた可能性に留意する必要がある。第二に、動機の観点に基づく、心理臨床家を志望した動機だけでなく、研究活動に関わる動機の種類とそれらの動機の形成・維持要因についても探索しつつ、実際の研究に関わる体験や教育環境、研究活動の実際との関

連を検討していく必要がある。

付記

本調査に快くご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。本研究はJSPS科研費JP16K17343の助成を受けて行われました。

引用文献

- Aarons, G. A. (2004). Mental health provider attitudes toward adoption of evidence based practice: The Evidence Based Practice Attitude Scale (EBPAS). *Mental Health Services Research*, **6**, 61-74.
- APA Presidential Task Force on Evidence-Based Practice (2006). Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist*, **61**, 271-285.
- 新井 雅 (2019a). 心理専門職による研究知見の効果的生成・臨床的活用・社会的普及に関する展望. *心理臨床学研究*, **36**, 657-667.
- 新井 雅 (2019b). 心理専門職による研究活動を基盤とした臨床的・社会的活動の展開に関する探索的検討. *跡見学園女子大学心理学部紀要*, **1**, 47-61.
- 新井 雅 (印刷中). 心理専門職・大学院生の研究活動とエビデンスに基づく実践に関わる要因の検討. *心理臨床学研究*
- Barnett, J. E., Baker, E. K., Elman, N. S., & Schoener, G. R. (2007). In pursuit of wellness: The self-care imperative. *Professional Psychology: Research and Practice*, **38**, 603-612.
- Corey, M. & Corey, G. (1998). *Becoming a helper*. 3rd ed. CA US: Thomson Brooks/Cole Publishing. 下山晴彦(監)堀越 勝・堀越あゆみ(訳) (2004). 心理援助の専門職になるために——臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト. 金剛出版.
- Forester, M., Kahn, J. H., & Hesson-McInnis, M. S. (2004). Factor structures of three measures of research self-efficacy. *Journal of Career Assessment*, **12**, 3-16.
- Gelso, C. J., Baumann, E. C., Chui, H. T., & Savelle, A. E. (2013). The making of a scientist-psychotherapist: The research training environment and the psychotherapist. *Psychotherapy*, **50**, 139-149.
- Gelso, C. J., Mallinckrodt, B., & Judge, A. B. (1996). Research training environment, attitudes toward research, and research self-efficacy: The Revised Research Training Environment Scale. *The Counseling Psychologist*, **24**, 304-322.
- 岩壁 茂 (2013). 臨床心理学における研究の多様性と科学性—事例研究を超えて. *臨床心理学*, **13**, 313-318.
- Kahn, J. H., & Schlosser, L. Z. (2014). Research training in professional psychology. In W. B. Johnson & N. J. Kaslow (Eds.). *The Oxford handbook of education and training in professional psychology*. New York: Oxford University Press. pp. 185-200.
- Kahn, J. H., & Scott, N. A. (1997). Predic-

- tors of research productivity and science-related career goals among counseling psychology doctoral students. *The Counseling Psychologist*, **25**, 38-67.
- 金沢吉展・岩壁 茂(2013). 心理臨床家を志した当初の動機と現在の動機に関する質的分析. 明治学院大学心理学紀要, **23**, 137-147.
- Lilienfeld, S. O., Ritschel, L. A., Lynn, S. J., Cautin, R. L., & Lutzman, R. D. (2013). Why many clinical psychologists are resistant to evidence based practice: Root causes and constructive remedies. *Clinical Psychology Review*, **33**, 883-900.
- Mallinckrodt, B., & Gelso, C. J. (2002). Impact of research training environment and Holland personality type: A 15-year follow-up of research productivity. *Journal of Counseling Psychology*, **49**, 60-70.
- Murphy, R. A., & Halgin, R. P. (1995). Influences on the career choice of psychotherapists. *Professional Psychology: Research and Practice*, **26**, 422-426.
- Nelson, T. D. & Steele, R. G. (2007). Predictors of practitioner self-reported use of evidence-based practices: Practitioner training, clinical setting, and attitudes toward research. *Administration and Policy in Mental Health and Mental Health Services Research*, **34**, 319-330.
- Shimoyama, H. (2004). The role of science in developing clinical psychology as a profession : A comparative study on clinical psychology between Japan and Britain. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **43**, 121-131.
- 丹野義彦(2005). 基礎心理学と臨床心理学の対話はどのように可能か. 基礎心理学研究, **24**, 47-54.
- 上野まどか・金沢吉展(2015). 心理臨床家の志望動機のタイプと属性の関連についての探索的検討. 心理臨床学研究, **33**, 105-115.